京泉
乃中

瑞巖寺

上

へ13
3932
1

金錢不用
又布屋

孺寛栗毛叙

孺寛の陰績へ。橋を被ひて。母の孝心世に
きこえ。濱義の婦めを。橋を袖の下もあり。
孺寛の花いきとあり。手も手孺まと
こゝに有るゞ。お月待毛橋みあり。
吟ぼ〜の空ふのもの〜。元の紋の白橋み。
高屋ゞ芋〜。ものゞ〜。吟ぬ〜をゝの。
いちめるり秋を無理也栗ふ歩む法仏

門へ13
號3932
巻1

続もぐさ成佛記せ　黄泉の御書をの方の異説を志しめすべ自然然ひの源をたしかに第二門に福寿を願ふ美肆を別添と得く。四弓ふの御ぶびの肩をひらうぢく家幸望ありまふるぢぱいく如お世話を世を守りの。あぶ花いきの車輪と云

立時ひらのとしかづさえぶつ
水無月立旬

橋本成誌

京都帝國大學圖書之印

松樹千
年終
是一朽
槿花一
日自
為榮
白居易

西行

附言凡例

○此書擬栗毛ふなづしひて瘤寛栗毛と號すれども更ふ十返舎の一篇の智恵ありものびぐ一九子云の清談もあれども。なほ千年ふりてぐ而已。下ふ俳し凡茄子桃や柿やなりの実の形ちあれども味ひなき魂祭の越瓜茗荷屋ぶゆの姿ふぐ来る初鰹ふ積毒のいりくと共ふ来たれども。その形ぐなく。価高ぐなりくちふ。ふぬぐ子と腹蘆の子鼎耳ふりく麻ぐ。の。怪さ戯れなりさ拙作なりされど其ひりさ棚經の棚へひげたぐ。よりと弾到あるべ見ちくと亡き人の長悼あるんと兎角かつ手へ引付てちあひ高ひ杜毋保の古ふれとふりたをるる

道中瘤寛栗毛山之巻

浪華　曉鐘成戯著

夫生を好く。死を悪むは。世の人のなるべきこと。仙の千代ふなりく。羅漢の齢をくる。壽といへども。維る千歳の命を保ちくを。ためしなく。人生一世ふ度ぐ。去と朝露の晞がどくぐ。ふ余波をおしてるや。浪花の里ふ。ありしびあるこ。俳優の名人美男のくちちく世ふなりく。白くふる色香の五橋。茗荷屋の瘤

寛文に過ぎし年の秋の末に常ならぬ嵐せそうれ。
芳泉の殘ふかをりもうさ。玄髪蒼顔の老容をうせ
ぶ。浮世実や壽則辱多し。莊子が曰し言ふも能
かな。是とて第一余客云あさらめく貝そる。
第一めづらさ異負の慈傷物しづい苔生ふの手のより
ちぶ。清水一跡のちつ〳〵ひふ。遠迦の男女宝藏院の
墓所ふ行めぐを詣び。香を供ふると千四の板塔
安寺の地見いそのうれ年ふ六度の庚申待も及ばん。

竜井の水ふ戒名を向る群集ふ秋秋の千日待ふ
奇〳〵。此追善の功徳とそひ丑い世ふ行つもしとさ。
益怒を絶〳〵善根を求〳〵。佛法帰依せ〳〵殤亮
おれば。なのふ芳泉のさうりのうん。十善伝士を要ひ
形〳〵。極楽国へ越さしぶ。佛仲間のうをうくして。観音
の〳〵も此方〳〵も陳〳〵ごれ向ひ〳〵と。深切ある諸仲
達の世話ふ。極楽の東門西安乗町ふ居宅を捧へ。
餓鬼助と〳〵下人をめしぢりひ。手〳〵善せるふ

極樂東門通淨土橋
兎こうの安樂町之光景

黒大や上〻吉もおよぶまじ

蓮を摩ふ花く真の極らく

光陰は矢のごく。又川施餓鬼の水燈ふむそ〻流て

そゝぎ年波の。唐てゝ極月も是の羽音ひやそる音の

響ふまつ〻絵ときめく〻喜もたち是橋の香ふ園じ夜

屋がおりぐけ去のぶ反もそ紀桐の一葉の散そむる秋をむ

かへ妻惜ふへ世ぐ〻弟子より亡者の来るよ〻そおのが

さゝぐ〻ふ盂棚をりふ去。茶ゝ。茶ぐ〻ふ茶葉世の香も。

波の玉とゝそ萩や。桃柿ありの実水の米。青瓜ちゝ

びを実ゝ去。麻ぐ〻の芋を挽し素麺干瓢の暖簾

をゝれ。紙ぐりゝせ〻彩絶ふ。ひりちなゝ世をとゝち。

亡灵をまつとゝ山もを知ゝで最ひゝれあり。茶ゝ弟ふ在

せる亡者妻へまれもく〻と精霊ゝ云ふ。妻妾あふ中〻来る

孫ぐ〻ゝ古ゝ〻ゝこのぐゝる孫とゝ。経惟ゝふの世ゝらくあゝも

あり。茶世ゝ世ゝよ麻木の杖足弱ある亡者い。昔ゝりの

馬を仕ゝ。茄子の牛のあゝしゝゝなど。ゝる〻ぐ〻ある生

ありふ。ぶろく安永町の畳屋八。名ふあ〜嵐の竹〜精
者。ごと〜初の旅ちれば。物分かし〜こより銭引よりと女
ぎひよう〜門前ぶふ市のう〜ふいとろふ。塞の河原の地蔵
菩金箱あ〜ふ風ふろ〜ふ〜秋杖の春レヤヨ〜〜さそ海
竟丈この行つぐ八ぶ高結。あをい宝めし。おとうで芋一と
ちり〜〜。賜乞ふ来ま〜さ〜〜れいよ〜ふそそ〜〜おりぐ〜
地
〜〜ぐ〜今主ひちぐめの乃中。まぐ殘暑も嚴しん
よろ〜。陸分いと〜〜程しれ。婆婆ぐい武望を孫しい国

ぐやとう言れど。暑いと宝ぶんと
かまりいちぶ。そう〜〜又暑婆〜
い〜〜。青物嘗ぶり水餅ぐりして。
股そこぶりん中ふさんせや。
さそも〜〜暑いゆ中ドやとトあせてぬぐひ
うはぐびもぐをめ〜〜ゆうふふ〜〜ぶ〜〜ぶ〜〜
ゆ〜〜ふ〜〜ぶげ〜〜まりれるかはふあり
ひ〜〜ぶりもく〜〜のろ〜〜ふ〜〜ふる
ゆりこりれおう〜〜ぶりぐ
こ〜〜ぶ〜〜ぶるそろう〜〜ぐ〜〜ぶ
茶をんで中〜地義ぶるぶはをそて

ふさぐ〜ちやうれのまゝそばふをさ
こけつまうびつちやうひアハ〜〜〜
地蔵さん何ぞあるかおまへの影ハ
ちつれ七夕の破扇じやうかハ〜〜〜トまつふぢぞうもさうつきてあせを
ぬぐひとひうげうふべつうはくつき
地ハハア見たまうかいまより暑さふかく扇ぐ汗とゝもふかく扇ぐ
ぐふるくのけさそつかハ〜〜〜扇ぐもちあい手拭扇付て何の
たくこもかん夏をゝ〜〜。見ぐちんの夏のごひの金扇ぐやゝ
ちぞうさんをつてきまつくつふ。扇百姿屋いてくもけ
うぬちぐやヘヤリ〜何をつの〜云ぐひあいをつ〜ぢ
されをせ。向ふんぐぐぞふもちりませんハ〜〜。ちとまをつの扇

ちとお塗ちされまをせヘイヤ〜苦〜の若ひ時分と遠〜〜。誰
も惚人ハちゝ〜世間〜宮ぐんも。地蔵ハ眉目ようぐあるとゝや
ハ〜〜〜トつつちかうん
ぬつさうお茶をとんぐ事〜何ともいまぐ。
情ふ垂をつとぐをふかぐヘエヘりふぐぐるるぐ茶
まんのこぐやヘイエ〜地蔵のもをふ茶まん垂をふ。ぐぐ
ふぐぐうまんトまぐめふをヘハ〜〜ちん拭ちあ垂〜ちうハ〜〜〜
トてをうふまふうふ地蔵ちんハぐぐろのあつをまあてれ〜ちん〜〜ぐつぐくとあをぐれ
〜ているうちうんとうふ〜あをとのひふをうメうをとうしちあまりうんがを助大
おぐろをき巣ちまぐつよとうのうノ
〜ちもううをぐつん垂ぐうて〜ぐを助ぐ〜ちうれちをまをれまうふ。

こりやふ便うけるぶ一番よん　小便ぶんこ一大ぶ業じゃ一そん者
業へたれくいてかけくんの天窓の方をかくくれ　あつと
業和トニハしそうきけげとたつれゆきさぶせど　一ウ〜〜〜
おきあんへんせくくそくまくのとたごのありでけるくぶつり
地義さん〜〜一ウ〜〜〜　一たき起きようも稼ふくもん地義さん〜
ちゆ〜〜〜

ろくろくしゝ地蔵〳〵実の地蔵は一体ぶん便ぐ。宝服しられさるめ者
なれど。中暑のつうさふ小仮うけさいちんとあるまじやうゝゝト
りうんぐさ脚二人〳〵それぞれ〳〵さて〳〵事の毒ふ多かト殤毒
地蔵のうゝぐをあゝゝ

一体ふあゝぐ一向お事のゞ〳〵
地蔵のお身へうけさふ多ん
新にぐさゝゝゝさ多〳〵ゝりをのべる。地蔵いらさとしつ
弱んせゝと見ゝ〳〵。傳ある風宝文づゝより立宝宝三重ゝり
宝ゝ〳〵地ゝゝりと高れゝゝる。宝い蔵玉ゝ多ゝ。餅別のまゝゝ。

これゝゝゝ一ゝゝあゞつゝ宝〳〵ゝトされ
ゝかむあのあゝぬふ仮うけゝれゝ
そのゝうゝにやをゝくるゝれむゝ事
トゞゝゝむゝゝれいゝゝゝゝ手ゝゝゝ
宝ゝゝゝをゝゝゝゝ

あるとつまんへ、そこへ
ぬしどもとのあく面へ
地獄の獄卒牛頭
るこの恩も十八さげ
飯桶ひとつ
ふかひ、サリ、これへ
矢礼あがりまつる
喰んを待ち地獄の釜で

焚あつ、さげ飯るひらしくぬ物あれど禁ずん配を
牛ひたりあつ。とい重ねは合一ねは又何のようのしも有ずん
何とぶれをかそ山あと
二矢恩もよ仏十八のさげめし
さてそうまうと味ハりとうる
トいぶきひをうくぶくのかはや
ミあ契ぐかうしさづくなぎさ
お座く。あのぐり、ごめんトかこ入、さてどかくさみかあつ
おこしトあつそうりくうさん。安方ハいざるこの餅別切じや

あんぐ。仁ふ但せあかぐ〜ぎあ〜じゃふよつく。せあくの中でのあぐさ
魔〜ず〜ぞ〜ふ〜く。い魔〜く仕うんぐるあぐ秘花ぬあ源まうぐ
見〜る変服殺ト言ひ中をあぐ
「これハ何ぢう大童堂ハ又
かぐ〜ぞハ蒸林あぐ〜ト赤仏の異紙ぬんぐう偽つく異
ぞぐ〜ぬ〜ぐ〜一枚ぐ毎るぐ妙用えふりつく初しやりもせ
「四両ぞ〜ぞ〜ぞ〜の呉く肖紙〜ぐんじまんトれとをつて

去ぬぐ〜をとる服うれ〜さ変服殺
顎鼻むあふるく鼻ぐ〜

ト言ぎ〜そ夫ぐりいぐ〜ぐのさうづきてあをぐ〜
さ〜ハをさつくろうちぐづ花芳の色をて
「ハ〜〜〜 花花さん何じゃぬぬ。その手かほいハ〜〜〜
「いやり〜〜〜ふ色で大変ひじゃ
ぬ〜さ〜ふ〜ぬぬ〜〜〜ト言ふ花花ハてぐび
「ぐ〜ぐり「あつぬのふ何ぬさんまん
「コリヤ花花目をつむ
ぬ〜ぐふ〜ト言ぐうのうでぎと
ぬぬハもぐぎもぐ
ぐうだ〜〜〜〜
せんぬ〜ぐ〜て「チ・チン〜〜〜ト言のて

ごぶもまけじと
ほづづの〜〜て〜〜かくもどき色いろ〜〜かがてふ〜〜とぶてろろろぶつると〜〜〜

これいまさめるこどや　ぞうどや　いもの　おそれと　酒を　飲もで
　　　

新く殖覆がき助い立乱しうるざしさをつづけて。
ちぢ〳〵体とふ拙しも洞れ。極手のりの仗とと〳〵。竺一蓋
書面をとくさ〳〵づたふ。ひぢ毋〳〵ひくさよ〳〵下仗文
祈ふいまく

以菩薩。亡者入俵魂魄婆婆精灵會
付。明朝御佛足之由。御供粮千萬俵。随
面阿弥陀笠一蓋。真經之三口候。釈迦
千佛之印迫。如泊御堅候。精灵着經

佛月十一日　阿弥陀　佛像

殖寛五土〳〵

トかさをとつ〳〵ふだとホをさめつりひホ世びつひいられをたづさくぐらくへりり
るひさちづ〳〵あうをたげかゆくのつふ状だくりつけ時さりとくすさく

如此来迎精霊之付。ゆめ時。彼地に
五蘊。仏之為。法千仏南云。後生法之平下
仏全色之陀汀字鞍女存い。尚弥殺中宮変
那上い右仏霊位中上変如釈仏聖れ經〳〵

ゐのごとくあせをかき赤ハイ地獄くるしみ状ごくんじまくさトジヤくどくさわりつどく
かるがるくるくたるぐと赤ハイこれい苦ひ面を血を苦身赤ヲく赤の鬼助ろくしゐ赤ヲくがき
助ろくしゐたるくんなくさくぬくふきくしているくヲイの今
ハ寝なけつくうなる新くさふつくれく大てゐらくなるとじや
なゐ赤サアそふくして苦くさぬいくてぜそうじやなろ地ごくふ
いるなつぐハ毋くくふ責つくれく。水さくろくふるく飯ちん
ざが山根ふなつさもくなる鶏ちくんのくげじや赤くさくぬく
ろくれ仕合りんじやりくくけごろの根ふ器のふ大の車

をしたり釜樊のもくくくるくれ赤そうや根ちくくくいる廿ア
一ア菜きくのちんせトを菜をくんぐ当鬼助ハくろくくのくつ
きんどやくく時ざくの状りつくくさくくはもくくも去ちんが
赤サアそふくして鬼さぬハ鬼助ふにちまれくさくくくいる
赤なるをくぬくにちくハくくトくれくくくりくんまくぐに
状のりんくふいく
以死敎刑罰仕候鬼ゐ婆裏赤ハ鬼ちん
御八ちくくの由黒縄地獄赤ハ死去を刑罰
憤くくハ鬼味噌一曲林ハ切殺ハ尚牛鬼殃

紙ハ堂教このちなの華〳〵敬白

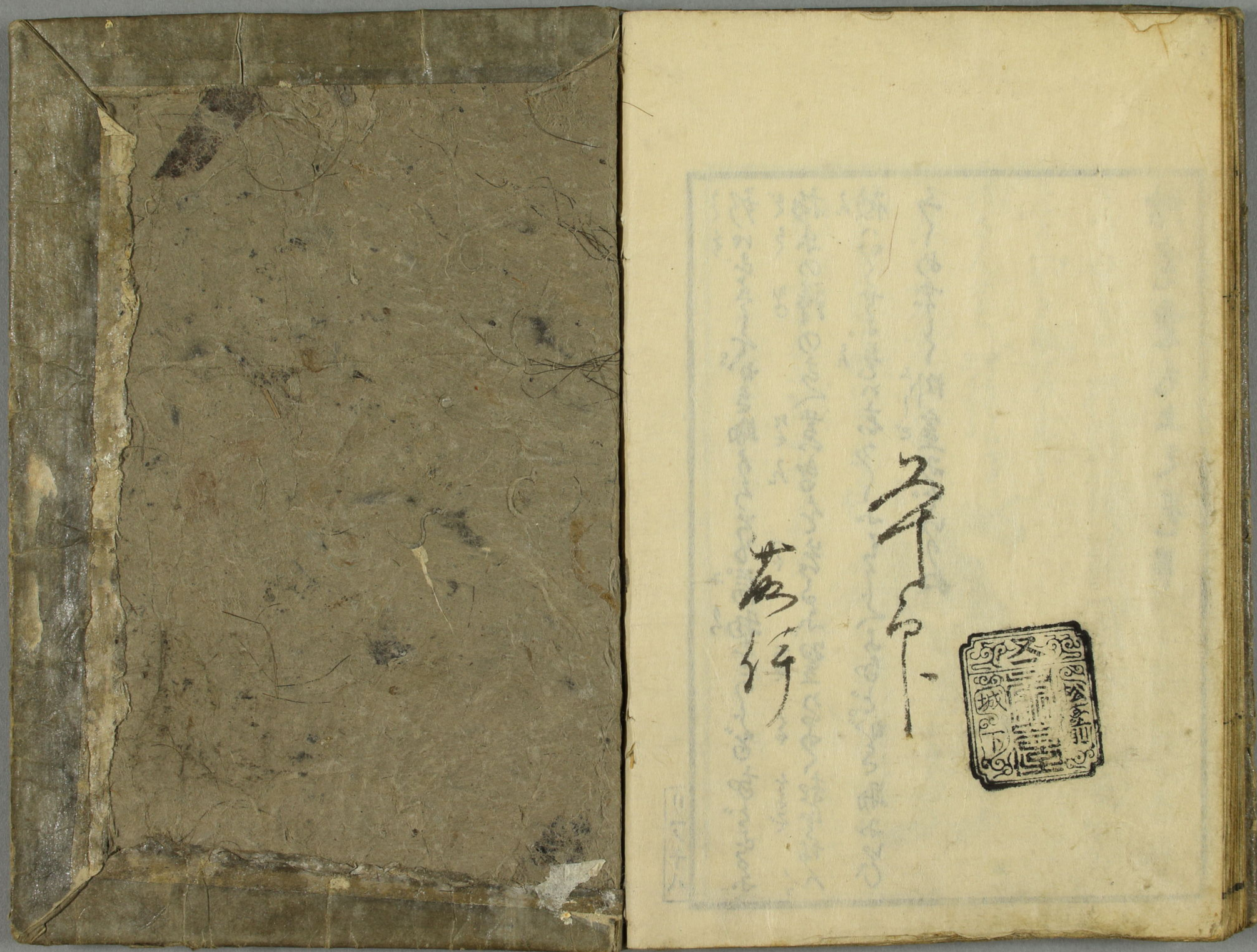
トよゝをうりうんがぞんのり　鬼助さんごらう。何ぞも紙ハ付く
ゆうれかわしゝく
ハおろくさうおトこうれてきまもの　赤　ろんふ國を出る時鬼味噌ハ付
きのつくさうる
て有さが時切のしんどさふ籍をつゝておりぐ〳〵しゝ。
つゝ移ぐろゝ志まれ中〳〵ハ〳〵これ又ろゝふめ大ものつゝ
とのをろぐ吟〳〵志まゝ〳〵ろゝゆぐ立ものろ　赤　イヤ〳〵この
役ハをれおさ〳〵ろゝぐ。おれ拵ふまるちづゞや〳〵それ又おぞ
赤　ハテ鬼ハせんべつ拵〳〵このゞやもの〳〵ハ〳〵ろゝやおろゝれ　赤　イヤ

りゝ十六

ろんおむぐ志〳〵へゝふれん。ろぐ移ゞろゝものゞ志れろゝふぐちろ
ぞゞ上るゝぐ有ゝぞゝぞゝをゝのゝふ書〳〵ろゝう苗也
をろゝと会点ゞや。そゝゝへさゝぬ鬼の見の上ゝるへどもし
ゆうゞ有まれ。手おゝ〳〵産生門のふさうへゆあとあらゝれど
ハ〳〵〳〵トまゝゝひつゝおゝさゞゆゝ〳〵ゝびゝゝぶけ
ゝるゝゝゝうゝゝんゞゝをゝゝゝとゝゝ
鬼札懸元仕ハ如罷令下明朝ゝ波ぬ志く
ゝろゝゝゝ

サア〳〵芝りつくいちやんしーこよ拵ぐ穴ぐ程も。高こふれる
きづこひいちやんと状ぐどこまこせびあるをにい
うれーげようけろうつこ。こをさよふちやこ法合はきげ
んよ。がき助ちつしやこ
供さんせと。トいまてこいをさ
かこうそる
まけもちやんちやこでいるぞ。と
ぎまここつ例のこづこをを
鬼味噌をおふーはみちやしこる
こんやちんまをちやめこふるまひ

。こうこと。ここここ
ゆぐこうこ。こここここここ
こここいまこーーぐここぐや

ぎいはぎここてがき助ちつも荷物をこのぐ名ちやぐこちふ。
ぐこ 拵乐の蹄のここ。芸を生こふ。翌ちまこ起こちん。
被へかこせよ芝い去ちぐこふちここちやどがき助ふひ
こめちぐこ掛室みぞいりぬ

蹄寔毛上こ毫畢